

岐阜県文化財保護センター
調査報告書 第144集

御 望 A 遺 跡
(第1分冊)

2020

岐阜県文化財保護センター

御^ご望^も A 遺 跡
(第 1 分冊)

2020

岐阜県文化財保護センター



C地点（北から）



縄文時代前期の竪穴建物S17～S19（北から）



縄文時代中期の竪穴建物S11（西から）



古代の竪穴建物S118（南から）

序

岐阜市は、岐阜県の中央南部、濃尾平野の北端に位置しています。市内には、長良川が貫流し、金華山がそびえたつ、緑豊かな地域です。

このたび、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所による東海環状自動車道建設に伴い、岐阜市御望に所在する御望A遺跡の発掘調査を平成28年度に実施しました。御望A遺跡は、平成3年度～平成5年度の岐阜市教育委員会による発掘調査で、縄文時代前期を主とした集落跡が確認されている遺跡です。

今回の発掘調査では、縄文時代前期、縄文時代中期、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、古代の大きく5時期の建物跡が見つかり、当遺跡が縄文時代前期から古代まで断続的に集落域として土地利用されていたことが分かりました。縄文時代前期後葉の土器は、西日本系、東日本系、在地系のものからなり、表面に赤彩を施すものもありました。また、当遺跡で初めて見つかった古墳時代後期の竪穴建物や掘立柱建物は、当遺跡に近接する御望山に立地する古墳群の造営時期と重なることから、古墳群を造営した集団の居住域の候補地の一つとして想定できます。本報告書が埋蔵文化財に対する認識を深めるとともに、地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後となりましたが、発掘調査及び出土遺物の整理・報告書作成に当たりまして、御理解と御協力をいただきました関係機関並びに関係者各位、岐阜市教育委員会、地元地区の皆様へ深く感謝申し上げます。

令和2年2月

岐阜県文化財保護センター
所長 小林 法良

例 言

- 1 本書は、岐阜県岐阜市御望に所在する御望A遺跡（岐阜県遺跡番号 21201-02769）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、東海環状自動車道建設事業に伴うもので、国土交通省中部地方整備局から岐阜県が委託を受けた。発掘作業及び整理等作業は、岐阜県文化財保護センターが実施した。
- 3 小澤毅三重大学教授の指導のもとに、発掘調査は平成 28 年度に、整理等作業は平成 30 年度に実施した。
- 4 発掘作業及び整理等作業の担当は、本書第 1 章第 2 節に一括掲載した。
- 5 本書の執筆及び編集は笠井慎吾が行った。
- 6 発掘作業における現場管理、掘削、測量、景観写真撮影などの支援業務と、出土遺物の洗浄・注記、整理等作業における作業管理、出土遺物の整理作業、挿図・写真図版作成などの支援業務は、国際文化財株式会社中部支店に委託して行った。
- 7 遺物の写真撮影は、アートフォト右文に委託して行った。
- 8 鉄滓成分分析は株式会社パレオ・ラボに委託して行い、第 4 章に掲載した。第 4 章第 1 節は笠井が執筆した。
- 9 発掘調査及び報告書の作成に当たって、次の方々や機関から御指導・御協力をいただいた。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・五十音順）
内堀信雄、渡邊博人、岐阜市教育委員会
- 10 本文中の方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標系第Ⅶ系を使用する。
- 11 土層の色調は、小山正忠・竹原秀雄 2015『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社）による。
- 12 調査記録及び出土遺物は、岐阜県文化財保護センターで保管している。

目次（第1分冊）

序

例言

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過と方法	3

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	8
第3節 過去の調査	11

第3章 調査の成果

第1節 基本層序	14
第2節 遺構・遺物の概要	16
第3節 縄文時代前期の遺構・遺物	27
第4節 縄文時代中期の遺構・遺物	73
第5節 弥生時代後期～古墳時代前期の遺構・遺物	80
第6節 古墳時代後期の遺構・遺物	100
第7節 古代・中世の遺構・遺物	158
第8節 包含層出土遺物	176

報告書抄録

第2分冊 目次

遺構一覧表

遺物一覧表

発掘区全体図分割図

第4章 自然科学分析

第1節 分析の概要

第2節 鉄滓成分分析

第5章 総括

插图目次

図1 遺跡位置図	1	図44 SK243	64
図2 試掘調査坑、本発掘調査範囲位置図	2	図45 SK243 出土遺物	65
図3 発掘区設定図	4	図46 SK246・SK249	67
図4 岐阜市北西部の地形	7	図47 SK252	68
図5 周辺遺跡位置図	10	図48 SK392・SK405・SK439	69
図6 岐阜市調査及びセンター調査の発掘区	11	図49 SK437	71
図7 岐阜市調査A・C区遺構分布図	13	図50 SP110・SP7・SP45・SP104	72
図8 基本層序模式図	15	図51 SI1(1)	74
図9 埋土・断面形状模式図	17	図52 SI1(2)	75
図10 打製・磨製石織の基部による分類模式図	21	図53 SI1(3)	76
図11 打製・磨製石織の側縁及び脚部形態分類模式図	21	図54 SK20	77
図12 打製・磨製石織欠損部位分類模式図	21	図55 SK160	78
図13 打製石斧欠損部位模式図	23	図56 SK201・SP2	79
図14 石錘計測部位	24	図57 SA3	80
図15 SI7(1)	28	図58 SA5	81
図16 SI7(2)	29	図59 SI2(1)	82
図17 SI7出土遺物(1)	30	図60 SI2(2)	83
図18 SI7出土遺物(2)	31	図61 SI3(1)	85
図19 SI7出土遺物(3)	32	図62 SI3(2)	86
図20 SI7出土遺物(4)	33	図63 SI4(1)	87
図21 SI7出土遺物(5)	34	図64 SI4(2)	88
図22 SI8(1)	36	図65 SI4出土遺物	89
図23 SI8(2)	37	図66 SI5(1)	90
図24 SI8出土遺物(1)	38	図67 SI5(2)	91
図25 SI8出土遺物(2)	39	図68 SI10	93
図26 SI8出土遺物(3)	40	図69 SI28	94
図27 SI9(1)	43	図70 SK17	95
図28 SI9(2)	44	図71 SK279・SK369・SK404・SP76・SP173	97
図29 SI9出土遺物(1)	45	図72 SD4	98
図30 SI9出土遺物(2)	46	図73 SD4出土遺物	99
図31 SI9出土遺物(3)	47	図74 SA1	100
図32 SI9出土遺物(4)	48	図75 SA2	101
図33 SI9出土遺物(5)	49	図76 SA4・SA6	102
図34 SI9出土遺物(6)	50	図77 SB1	104
図35 SI9出土遺物(7)	51	図78 SB2	105
図36 SK5・SK9	54	図79 SB3	106
図37 SK27・SK39	56	図80 SI6(1)	108
図38 SK65	57	図81 SI6(2)	109
図39 SK69	58	図82 SI6(3)	110
図40 SK79	59	図83 SI6出土遺物	111
図41 SK128・SK129	60	図84 SI11(1)	112
図42 SK153	62	図85 SI11(2)	113
図43 SK200・SK232	63	図86 SI11(3)	114

図 87	SI12 (1)	116	図 117	SI26	151
図 88	SI12 (2)	117	図 118	SK151・SK188・SK271	152
図 89	SI12 (3)	118	図 119	SK402・SK503	153
図 90	SI13	119	図 120	SK506・SK507・SK508	154
図 91	SI14 (1)	120	図 121	SK475・SK478・SK497	156
図 92	SI14 (2)	121	図 122	SK548・SK549	157
図 93	SI14 (3)	122	図 123	SI17 (1)	159
図 94	SI14 (4)	123	図 124	SI17 (2)	160
図 95	SI14 出土遺物	124	図 125	SI17 (3)	161
図 96	SI15	127	図 126	SI18 (1)	162
図 97	SI16	128	図 127	SI18 (2)	163
図 98	SI16 出土遺物	129	図 128	SI18 (3)	164
図 99	SI19 (1)	130	図 129	SI18 (4)	165
図 100	SI19 (2)	131	図 130	SI18 出土遺物	166
図 101	SI19 (3)	132	図 131	SI21 (1)	168
図 102	SI20 (1)	133	図 132	SI21 (2)	169
図 103	SI20 (2)	134	図 133	SI21 (3)	170
図 104	SI22 (1)	136	図 134	SI27	172
図 105	SI22 (2)	137	図 135	SI27 出土遺物	173
図 106	SI22 (3)	138	図 136	SK380・SP142・SD3	174
図 107	SI22 (4)	139	図 137	包含層出土遺物 (1)	178
図 108	SI22 出土遺物	140	図 138	包含層出土遺物 (2)	179
図 109	SI23	142	図 139	包含層出土遺物 (3)	180
図 110	SI23 出土遺物	143	図 140	包含層出土遺物 (4)	181
図 111	SI24 (1)	144	図 141	包含層出土遺物 (5)	182
図 112	SI24 (2)	145	図 142	包含層出土遺物 (6)	183
図 113	SI24 (3)	146	図 143	包含層出土遺物 (7)	184
図 114	SI25 (1)	148	図 144	包含層出土遺物 (8)	185
図 115	SI25 (2)	149	図 145	包含層出土遺物 (9)	186
図 116	SI25 出土遺物	150	図 146	包含層出土遺物 (10)	187

表目次

表 1	試掘・確認調査結果	2	表 5	検出遺構一覧表	16
表 2	周辺遺跡一覧表	9	表 6	出土遺物一覧表	18
表 3	岐阜市調査の主な検出遺構	12	表 7	石器類器種別数量	19
表 4	岐阜市調査における出土土器・陶磁器 (接合前破片数)	12	表 8	器種別石材一覧表	20

写真図版目次

巻頭図版

図版 1 C地点

縄文時代前期の竪穴建物 SI 7～SI 9

図版 2 縄文時代中期の竪穴建物 SI 1

古代の竪穴建物 SI18

挿入写真目次

写真1	A地点調査前風景	6	写真6	遺構実測	6
写真2	表土掘削	6	写真7	ラジコンヘリ景観写真撮影	6
写真3	包含層掘削	6	写真8	現地見学会	6
写真4	遺構検出	6	写真9	A地点発掘区	6
写真5	遺構掘削	6			

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

御望A遺跡は、岐阜市御望に所在する。当遺跡は、平成3年度～5年度に市道西郷1号線の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を岐阜市教育委員会が実施しており、縄文時代前期、縄文時代中期、弥生時代後期、古代の集落跡を確認している。

当遺跡及びその周辺において、東海環状自動車道が計画された。東海環状自動車道は、東名・名神高速道路、中央自動車道、東海北陸自動車道などを、環状にネットワーク化することを目的とし、鋭意建設が進められている自動車専用道路である。

この事業に伴う当遺跡の試掘・確認調査は、国土交通省中部地方整備局岐阜国道事務所（以下「岐阜国道事務所」という。）の依頼により、平成26年度から27年度にかけて岐阜県教育委員会が実施した。平成26年度の調査では、試掘調査坑8箇所のうち6箇所において縄文時代から古代にかけての遺構や遺物を確認し、うち3箇所では堅穴状遺構を確認した。平成27年度の調査では、試掘調査坑7箇所のうち2箇所において古墳時代から古代にかけての堅穴状遺構を含む遺構や遺物を確認した。そ

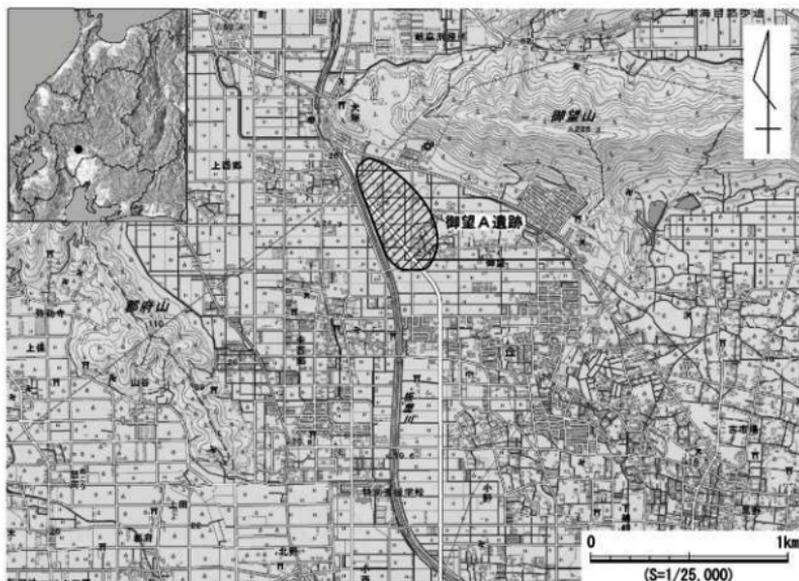


図1 遺跡位置図（国土地理院発行1:25,000地形図「北方」）

2 第1章 調査の経緯

の結果をもとに、平成27年11月4日に岐阜県教育委員会社会教育文化課は岐阜県埋蔵文化財発掘調査検討会において、部分的な本発掘調査が必要との意見をまとめた。

本発掘調査は、平成28年度に2427.5㎡を対象に、岐阜県文化財保護センター（以下「センター」という。）が岐阜国道事務所から、東海環状自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業の依頼により、発掘調査を開始した。その後の工事計画の変更により、発掘調査対象面積は1,866㎡となった。

本工事については、文化財保護法第94条第1項の規定に基づき、岐阜国道事務所長から岐阜県教育委員会教育長（以下「県教育長」という。）あて埋蔵文化財発掘通知（平成28年3月25日付け国部整岐調第246号）が提出され、同法第94条第4項の規定に基づき、県教育長から同事務所長あて発掘調査実施勧告（平成28年3月31日付け社文第54号の213）を通知した。同事務所長は発掘調査の実施を県教育長に依頼し、センターが発掘調査を実施した。センター所長は調査着手後、埋蔵文化財発掘調査の報告（平成28年5月26日付け文財セ第71号）を、県教育長あてに提出した。

表1 試掘・確認調査結果

年度	試掘坑 No.	検出遺構 (基数)	縄文土器	弥生土器	須恵器	陶磁器類	石器類	合計
平成26年度	TP1	竪穴状遺構2、土坑9、溝状遺構2	2	0	0	0	1	3
	TP2	土坑1、溝状遺構1	0	2	0	0	0	2
	TP3	竪穴状遺構2、土坑4	0	34	1	0	0	35
	TP4	竪穴状遺構2、土坑1	4	72	3	1	4	84
	TP5	土坑10	1	1	0	1	0	3
	TP6	竪穴状遺構1、土坑9	0	1	2	0	0	3
	TP7	なし	0	4	0	1	0	5
	TP8	なし	0	0	0	0	0	0
平成27年度	TP9	竪穴状遺構3、土坑6	0	7	1	0	0	8
	TP10	なし	0	1	0	1	0	2
	TP11	なし	0	3	1	0	0	4
	TP12	なし	0	0	0	0	0	0
	TP13	なし	0	0	1	0	0	1
	TP14	竪穴状遺構2、土坑1	0	7	25	1	0	33
	TP15	なし	0	0	0	1	0	1
	合計	竪穴状遺構12、土坑41、溝状遺構3	7	132	34	6	5	184

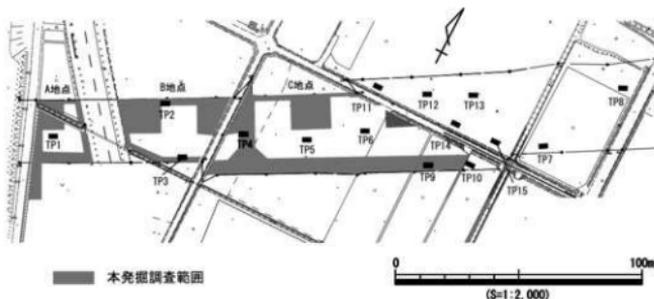


図2 試掘調査坑、本発掘調査範囲位置図

第2節 調査の方法と経過

1 調査の方法

発掘調査は、平成28年度に1,866㎡を実施した。発掘調査対象地は道路建設計画により橋脚や水路、側道が建設される部分である。

発掘区は、市道・農道をはさんで大きく3地点に分かれるため、市道の西側をA地点、市道と農道の間をB地点、農道の東側をC地点と区分した。世界測地系座標のX=-58,030、Y=-42,340を原点に一辺100mで区画(大グリッド)し、発掘区が収まるようにA・Bの区画を付した。さらにその中に、5m×5mの小区画を設定し、北から南へAからT、西から東へ1から20とした。そのため、発掘区の北東隅のグリッドはBB19、南西隅のグリッドはAT9となる。

発掘調査対象地は、調査前には水田として利用されていた場所で、調査初めにA地点では発掘区の東壁と南壁沿いで、B地点では南壁沿いで、C地点では西壁と南壁沿いでそれぞれ土層観察を行った。

発掘調査では、まず重機により表土掘削を行い、その後、遺物包含層掘削、遺構検出、遺構掘削を人力で行った。遺構の調査記録は写真撮影及び手測り実測、デジタル測量を行った。検出した遺構は原則として検出順に通番を付し、整理等作業時に遺構種別番号を設けた。遺物包含層や遺構内から出土した遺物は、原則としてトータルステーションにより出土位置を測定して取り上げた。遺物には、取り上げ単位ごとに遺物ラベルを添付した。遺物ラベルには「西暦下二桁とGM(遺跡名略号)」「出土場所(遺構番号又はグリッド番号)」「出土層位」「取上日」「備考」を記入し、この記録をもとに遺物台帳を作成した。遺構番号はSと3桁の数字により表記した(例、S001)。

発掘区全体の景観写真撮影は、A地点は脚立から、B地点は高所作業車から撮影し、C地点はRCヘリコプターにより撮影した。

出土遺物の一次整理作業(洗浄及び注記作業、遺物台帳作成)は当センター三田洞整理所にて実施した。

2 調査の経過

現地での調査経過は以下のとおりである。A地点は発掘区の南部を借地して調査したため、発掘区をA地点前半区(北部)、A地点後半区(南部)に分けて調査を行った。また、C地点は発掘区南側に隣接する水田への仮設道を設置したため、その仮設道の西側をC地点前半区、仮設道を含めた東側をC地点後半区と分けて調査した。

第1週(5/16~5/20) A地点前半区表土掘削開始(5/17)。A地点前半区包含層掘削開始(5/20)。

第2週(5/23~5/27) SI1(堅穴建物)とその石囲炉を検出(5/24)。

第3週(5/30~6/3) SI1の炉内部から縄文土器がまとまって出土、SK39(土坑)から石器がまとまって出土(6/3)。

第4週(6/6~6/10) B地点表土掘削開始(6/8)。

第5週(6/13~6/17) A地点前半区水路北側景観写真撮影(6/15)。

第6週(6/20~6/24) B地点包含層掘削開始(6/20)。A地点前半区水路北側景観写真撮影(6/21)。

第7週(6/27~7/1) SI5・SI6(堅穴建物)を検出(6/29)。

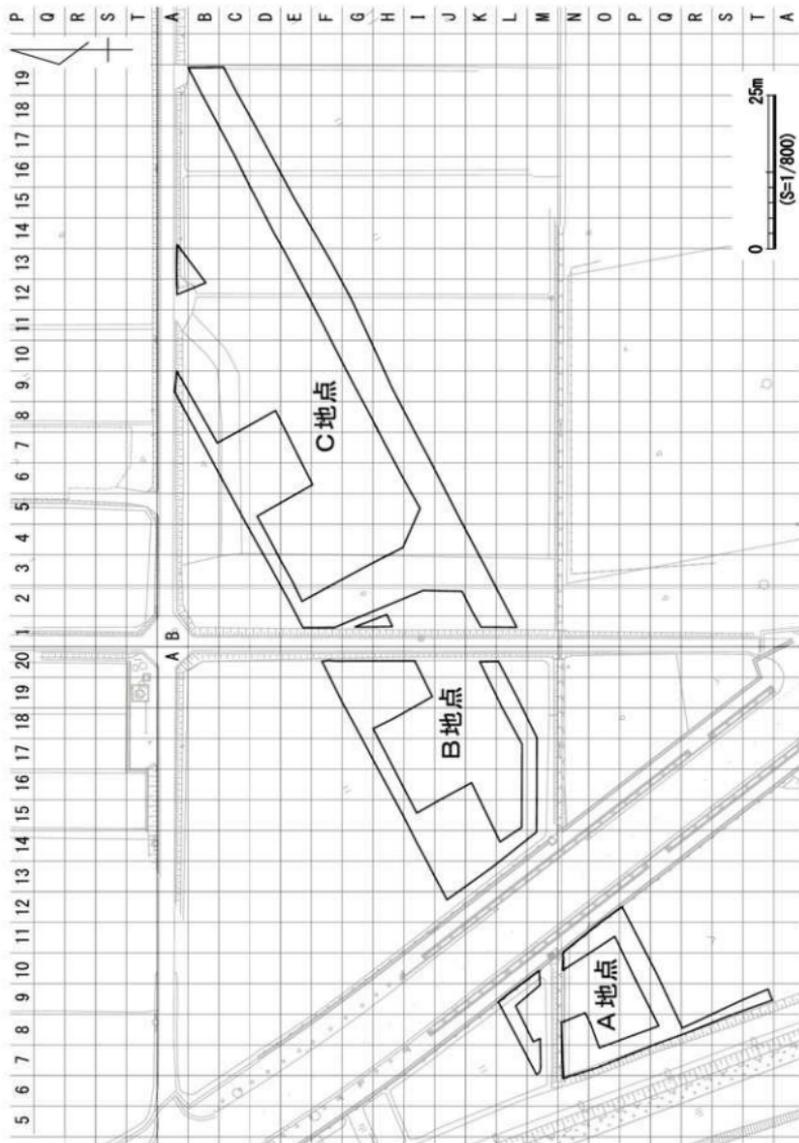


图3 免掘区設定図

- 第8週 (7/4~7/8) A地点前半区埋戻し作業終了 (7/7)。
- 第9週 (7/11~7/15) SK151 (土坑) から完形に近い山茶碗が出土 (7/11)。SI4 (堅穴建物) を検出 (7/12)。
- 第10週 (7/19~7/22) 岐阜市歴史博物館ボランティア (20名) 現場見学 (7/20)。SI2 (堅穴建物) を検出 (7/20)。
- 第11週 (7/25~7/29) C地点前半区表土掘削開始 (7/26)。SI3 (堅穴建物) を検出 (7/29)。
- 第12週 (8/1~8/5) 地域住民 (3名) 現場見学 (8/3)。B地点景観写真撮影 (8/5)。
- 第13週 (8/8~8/12) SK243 (土坑) から縄文土器・石器がまとまって出土 (8/9)。C地点包含層掘削開始 (8/10)。夏期休業 (8/11~12)。
- 第14週 (8/15~8/19) 夏期休業 (8/15~16)。
- 第15週 (8/22~8/26) SI18 (堅穴建物) とそのカマドを検出 (8/22)。SI17 (堅穴建物) とそのカマドを検出 (8/22)。SI16 (堅穴建物) を検出 (8/24)。
- 第16週 (8/29~9/2) SI18のカマド内部から土師器がまとまって出土 (8/31)。B地点埋戻し作業終了 (9/1)。
- 第17週 (9/5~9/9) SI18のカマド底部から刀子が出土 (9/5)。SI15 (堅穴建物) を検出 (9/6)。SI14 (堅穴建物) を検出 (9/7)。SI11・SI12・SI13 (堅穴建物) を検出 (9/9)。
- 第18週 (9/12~9/16) 小澤毅氏 (三重大学教授) 現地指導 (9/12)。SI10 (堅穴建物) を検出 (9/14)。SI8 (堅穴建物) を検出 (9/16)。
- 第19週 (9/20~9/23) SI14の貯蔵穴から完形の須恵器が出土 (9/21)。SI9 (堅穴建物) を検出 (9/23)。
- 第20週 (9/26~9/30) S840の底面から縄文土器がまとまって出土 (9/30)。
- 第21週 (10/3~10/7) SI7・SI19 (堅穴建物) を検出 (10/4)。SI7・SI8・SI9 (堅穴建物) から縄文土器がまとまって出土、SI8の底面から石皿が出土 (10/6)。
- 第22週 (10/11~10/14) SI9の底面から縄文土器がまとまって出土 (10/12)。SI7の床面で地床炉を検出 (10/14)。
- 第23週 (10/17~10/21) C地点前半区景観写真撮影 (10/20)。現地見学会開催 (参加者98名) (10/22)。
- 第24週 (10/24~10/28) 渡邊博人氏 (各務原市青少年課) 現地指導 (10/24)。隣接する耕作地への仮設道確保のため作業休止 (10/27~28)。
- 第25週 (10/31~11/4) 隣接する耕作地への仮設道確保のため作業休止 (10/31)。C地点後半区表土掘削開始 (11/1)。C地点後半区包含層掘削開始 (11/2)。SI21・SI22 (堅穴建物) を検出 (11/2)。
- 第26週 (11/7~11/11) SI25・SI27 (堅穴建物) を検出 (11/7)。SI24 (堅穴建物) を検出 (11/11)。
- 第27週 (11/14~11/18) A地点後半区表土掘削開始 (11/14)。A地点後半区景観写真撮影 (11/15)。A地点後半区埋戻し作業終了 (11/16)。C地点後半区景観写真撮影 (11/18)。
- 第28週 (11/21~11/26) SI26 (堅穴建物) を検出 (11/21)。
- 第29週 (11/28~12/2) 発掘作業を終了 (12/1)。
- 第30週 (12/5~12/9) C地点埋戻し作業終了 (12/9)。

6 第1章 調査の経緯

出土遺物の洗浄・注記等の一次整理作業は、10月11日から12月16日までの期間に当センター三田洞整理所で行った。整理等作業は平成30年度に実施した。



写真1 A地点調査前風景



写真2 表土掘削



写真3 包含層掘削



写真4 遺構検出



写真5 遺構掘削



写真6 遺構実測



写真7 ラジコンヘリ景観写真撮影



写真8 現地見学会



写真9 A地点発掘区

3 調査体制

発掘作業及び整理等作業の体制は以下のとおりである。

センター所長	羽田能崇（平成28年度）、野村幹也（平成30年度）
総務課長	二宮 隆（平成28年度）、加藤武裕（平成30年度）
調査課長	春日井恒（平成28、30年度）
調査担当係長	河合洋尚（平成28年度）、鷺見博史（平成30年度）
担当調査職員	笠井慎吾（平成28、30年度）

第2章 遺跡の環境

第1節 地理的環境

当遺跡が所在する岐阜市は、岐阜県の南西部、濃尾平野の北部から美濃山地の南縁部に位置する。市内の北部及び東部には海拔300m～400mの山地が島状に分布し、南部及び西部には海拔30m以下の台地や沖積平地が広がっている。

当遺跡は、岐阜市の北西部、洪積世の末期（約3万年以前）に古根尾川によって形成された段丘面（黒野台地）に立地する（図4）。この段丘面の東側や南側は、伊自良川や板屋川の後背湿地性の氾濫原で、黒野台地はそれらの低湿地に半島状に突き出した形になっている。台地の同低位段丘面の面積は約3km²、標高は海拔25m～13mで、北西から南東に向かって約1,000分の4の勾配をもって低下していることから根尾川系の旧扇状地であったことが想定されるが、西側は現在の根尾川扇状地によって埋積されている。台地の表面はクロボクとよばれる厚さ1m内外の黑色腐植土層によって覆われ、沖積平地との高さの差は数m以下である。この黑色土層は今回の発掘調査でも認められ、当遺跡全域に広がる。過去の発掘調査の結果から縄文時代前期の生活面がこの土層中に存在したことが示唆されており、縄文時代前期にこの黑色土層は形成途中であったことが推定されている（岐阜市教育委員会1995）。また、黒野の名はこの黒色土に由来するという説もある（岐阜市1980）。台地の北側には、大塚古墳群や御望古墳群、洞第1古墳群、洞第2古墳群が所在する御望山（225.2m）が近接している。現在、当遺跡の西側には板屋川が南流しているが、昭和52年～54年の河川改修以前は東側に複数の支流が流れていた。

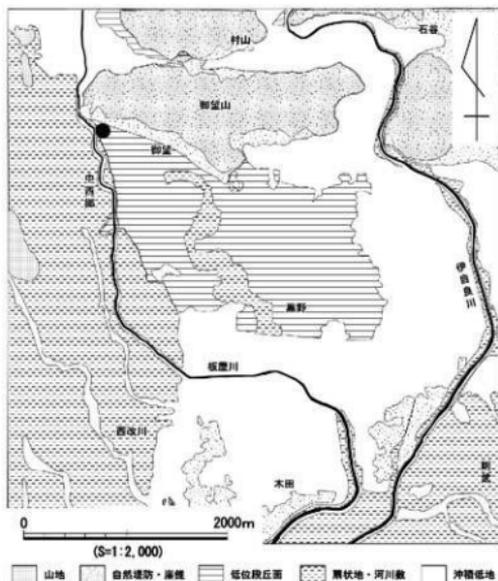


図4 岐阜市北西部の地形

第2節 歴史的環境

当遺跡(1)の周辺には、縄文時代～近世に営まれた遺跡が分布している(図5)。本節では、それらの概要を年代順に記す。なお、図5は『改訂版岐阜県遺跡地図』(岐阜県教委2007)を基に作成し¹⁾、本文中の遺跡名に続く括弧内の番号は、図5、表2と一致する。

縄文時代の遺跡は、御望A遺跡、犬塚遺跡(20)などがある。御望A遺跡は平成3年度～5年度にかけて岐阜市教育委員会によって発掘調査が行われ、前期後葉～末葉の集落跡であることが分かった。当該期の竪穴建物8軒、土坑24基、集石遺構18基などが確認され、住居域が中央の土坑・集石遺構の分布域を取り囲む環状集落である可能性が指摘されている。また、土坑24基の内11基で意図的に埋められた遺物が出土し、墓の可能性が考えられている。その他にも中期後葉の竪穴建物が2軒確認されている(岐阜市教育委員会1995)。犬塚遺跡では、石鏃、打製石斧、石錘が採集されている。

弥生時代の遺跡は、御望A遺跡、下西郷一本松遺跡(41)、船来山古墳群(55)、犬塚遺跡、洞山上遺跡(28)などがある。御望A遺跡では竪穴建物が1軒確認され、後期山中式頃に比定される土器片が出土している。竪穴建物からは外面口縁垂下部に色彩が認められる壺や、器台あるいは高坏の脚部と考えられるものが出土している。下西郷一本松遺跡は、平成11年度に財団法人岐阜市教育文化振興事業団によって発掘調査が行われ、弥生時代後期から古墳時代の長期間にわたって存続した集落であることが分かっている。検出した竪穴建物からは、山中式併行期から欠山式・廻間I式併行期にかけての土器が出土している(財団法人岐阜市教育文化振興事業団2000)。船来山古墳群では方形周溝墓が確認され、周溝内から後期の壺や器台が出土している。犬塚遺跡は中期から後期にかけての壺や高坏が採集され、中後期の集落と考えられている。洞山上遺跡では、後期の高坏が採集されている。

古墳時代の遺跡は、御望山南麓に犬塚古墳群(21)、御望古墳群(22)、洞第1古墳群(27)、洞第2古墳群(24)などがあり、どれも後期を中心とした群集墳である。犬塚古墳群では内部主体が横穴式石室の古墳が2基確認され、直刀・鉄鏃・須恵器の高坏・坏身が出土している。御望古墳群では、4基の古墳が確認され、一部は横穴式石室であることが分かっている。須恵器の高坏・坏身・平瓶が出土している。洞第1古墳群では、内部主体が横穴式石室の古墳が2基確認され、勾玉や管玉等の玉類、五獣鏡、直刀、須恵器の高坏・坏身が出土している。洞第2古墳群は平成27年度～28年度に当センターが発掘調査を行い、10基の古墳を確認した。主体部は木棺直葬のものが1基、横穴式石室のものが5基、小石室のものが3基であることが分かり、1基は主体部は検出されず周溝のみ検出した。木棺直葬の古墳からは、横穴式石室を有する古墳からは出土していない鉄剣や、県内では他に類をみない提灯が出土した。船来山古墳群では初頭から終末期にかけての古墳約290基が群集し、前期古墳21基(うち前方後円墳9基)、中期古墳3基、後期古墳202基が確認されている(本県市教育委員会2016)。また、黒野台地上にも小山古墳(29)や下西郷一本松遺跡などがある。下西郷一本松遺跡では、後期の集落跡が確認され、須恵器や耳環を副葬した古墳時代終末の長方形の土坑墓が見つまっている(財団法人岐阜市教育文化振興事業団2000)。

古代の遺跡は、黒野台地とその周辺に多く認められ、御望A遺跡、席田郡遺跡(45)、席田廃寺跡(46)、席田郡家推定地(47)、中山古窯跡(12)、中西郷中遺跡(53)、小野A遺跡(33)など

がある。御望A遺跡では、奈良時代の堅穴建物21軒が確認され、住居の向きが南北方向、平面は方形で、貼床を伴う傾向がみられる。内陸の消費地で作られた固形塩作り用の堅塩製作用土器55点が堅穴建物などから出土したほか、須恵器、土師器などの土器が出土し、須恵器には墨書(判読不明)や「美濃」と刻印が入ったものも含まれる(岐阜県2003)。席田郡府遺跡内には、『日本三代実録』中に仁和3年(887)に火災で国分寺・国分尼寺が消失した際に、一時期国分寺の機能を移した寺院(額原尼寺)に比定される席田廃寺跡、『続日本紀』中に靈龜元年(715)に本巣郡から分かれて建郡され、新羅系の渡来人74戸を入植させたとする席田郡家推定地がある。これらの遺跡群の東側には、古代須恵器や灰軸陶器等が多数確認され、集落跡が広がっていた可能性が指摘されている(本巣市教育委員会2016)。中山古窯跡は平安時代の瓦を焼いた古窯跡である。中西郷中遺跡や小野A遺跡は遺跡の範囲が広く、遺物も多数散布している。

中世の遺跡は、御望A遺跡、上保本郷遺跡(58)などがある。御望A遺跡では、戦国時代の堅穴状遺構1基、溝3条、掘立柱建物1棟が確認され、溝からは大量の土師器皿と少量の瀬戸・美濃及び常滑産の陶器が出土している。上保本郷遺跡は、平成27年度～29年度にかけて当センターが発掘調査を行い、室町時代の館跡や中世の鍛冶炉を確認した。館を区画する大溝からは大量の土師器が出土したほか、発掘区内からは、輪羽口、砥石、鉄滓などの鍛冶関連遺物も出土している。

表2 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	御望A遺跡	集落跡	縄文～近世	37	下西郷D遺跡	散布地	古代・中世
2	上西郷C遺跡	散布地	古代・中世	38	下西郷A遺跡	散布地	古代・中世
3	上西郷B遺跡	散布地	古代	39	下西郷B遺跡	散布地	古代
4	上西郷A遺跡	散布地	古代・中世	40	小西郷遺跡	散布地	古代・中世
5	明音寺古墳群	古墳	古墳	41	下西郷一本松遺跡	散布地	古代
6	文殊明音寺遺跡	散布地	古墳～近世	42	西改田村前遺跡	散布地	古代・中世
7	宝珠古墳	古墳	古墳	43	仏生寺上光寺遺跡	散布地	弥生～近世
8	下新村遺跡	散布地	古代	44	小西郷鶴木遺跡	散布地	弥生～近世
9	上新村遺跡	散布地	弥生	45	席田郡府遺跡	散布地	縄文～近世
10	文殊中山河遺跡	散布地	弥生～近世	46	席田廃寺跡	社寺跡	縄文～近世
11	宝珠古墳群	古墳	古墳	47	席田郡家推定地	散布地	縄文～近世
12	中山古窯跡	生産遺跡	古代	48	三橋東瀬古遺跡	散布地	弥生～近世
13	宇田遺跡	散布地	古墳・古代	49	三橋上瀬古遺跡	散布地	弥生～近世
14	宇田古墳群	古墳	古墳	50	元正寺遺跡	散布地	弥生～近世
15	則松遺跡	散布地	古代	51	中西郷C遺跡	散布地	古代
16	則松第1古墳群	古墳	古墳	52	中西郷B遺跡	散布地	古代
17	則松第2古墳群	古墳	古墳	53	中西郷中遺跡	散布地	古代・中世
18	村山遺跡	散布地	縄文	54	中西郷A遺跡	散布地	古代・中世
19	御望山城跡	城館跡	中世	55	船来山古墳群	古墳・その他の墓・散布地	旧石器～近世
20	大塚遺跡	散布地	縄文・弥生	56	正徳寺跡	社寺跡	中世・近世
21	大塚古墳群	古墳	古墳	57	舟本城跡	城館跡	中世
22	御望古墳群	古墳	古墳	58	上保本郷遺跡	集落跡・生産遺跡(鍛冶炉)・散布地	弥生～近世
23	鶴岡山城跡	城館跡	中世	59	上保岩坪1号古墳	古墳	古墳
24	洞第2古墳群	古墳	古墳	60	上保岩坪2号古墳	古墳	古墳
25	御望B遺跡	散布地	中世	61	赤船寺遺跡(赤船寺跡)	社寺跡・散布地	縄文～近世
26	御望C遺跡	散布地	中世	62	春稻神社遺跡	散布地	弥生～近世
27	洞第1古墳群	古墳	古墳	63	白山西洞古墓	その他の墓	縄文・古代・中世
28	洞山上遺跡	散布地	縄文	64	山西2号古墳	古墳	古墳
29	小山古墳	古墳	古墳	65	山西1号古墳	古墳	古墳
30	黒野河遺跡	散布地	古代・中世	66	文殊南門遺跡	散布地	弥生～近世
31	今川遺跡	散布地	古代・中世	67	文殊武備遺跡	散布地	古墳～近世
32	黒野城下町遺跡	城館跡・その他の遺跡(城下町)	近世	68	文殊西ノ門遺跡	散布地	弥生～近世
33	小野A遺跡	散布地	古代・中世	69	八幡神社裏山古墳	古墳	古墳
34	小野城跡	城館跡	中世	70	文殊古墳	古墳	古墳
35	下西郷C遺跡	散布地	古代・中世	71	文殊廃寺跡	散布地	弥生～近世
36	小野B遺跡	散布地	古代・中世	72	西ノ門1号古墳	古墳	古墳

近世の遺跡は、黒野城下町遺跡(32)、正傳寺跡(56)などがある。黒野城下町遺跡は、黒野台地南端に位置する近世初頭の城下町遺跡である。黒野城は、加藤貞泰が文禄4年(1595)に城主となり、慶長15年(1610)に転封となるまでの16年間に城した。正傳寺跡は、郡府山の南斜面に立地する。記録に拠れば正傳寺は、安永年中(1772年～1780年)に創建された臨済宗の寺院である。平成28年度に当センターが発掘調査を行い、石組みの基壇と基壇上に礎石建物を確認し、江戸時代後期の遺物が出土している。

注

- 1) 遺跡地図刊行後の変更については岐阜県生活環境部県民文化局文化伝承課に確認した。

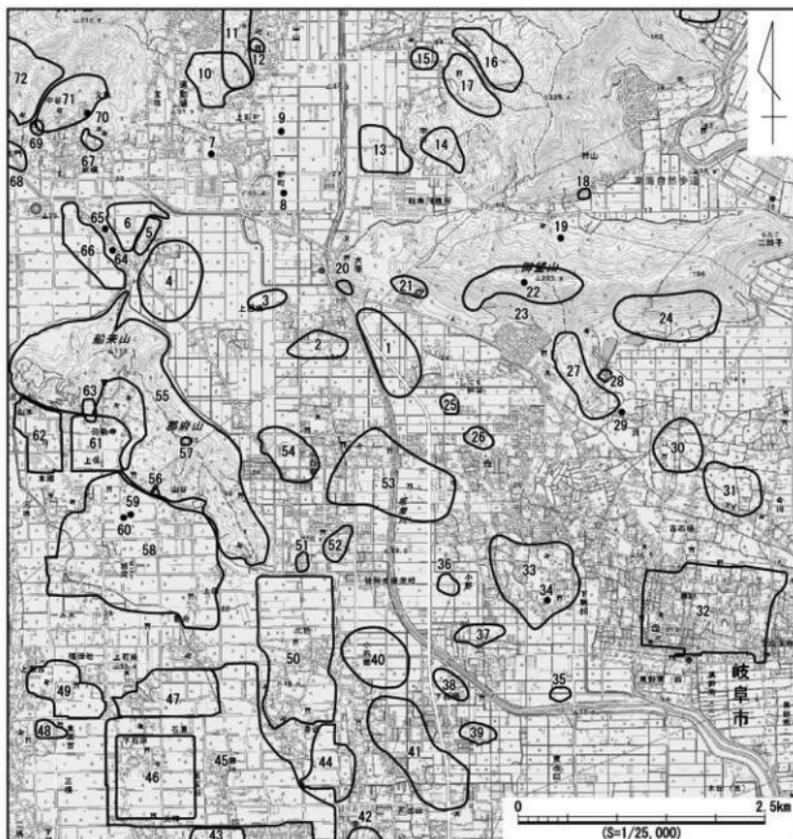


図5 周辺遺跡位置図(国土地理院発行1:25,000地形図「北方・美濃新海」)

第3節 過去の調査

前節に記したとおり、当遺跡では平成3年度～5年度にかけて岐阜市教育委員会によって発掘調査（以下、「岐阜市調査」という。）が行われた。岐阜市調査は市道西郷1号線の建設に伴い実施されたもので、発掘調査面積は約1,700㎡である。発掘区はA区～C区（図6）に分けられているが、ここでは、平成28年度に当センターが行った発掘調査（以下、「センター調査」という。）の発掘区に近接するA・C区の発掘調査成果を中心に概説する。なお、岐阜市調査の詳細については『御望遺跡』（岐阜市教育委員会1995）を参照されたい。

岐阜市調査で検出された主な遺構や出土した遺物は表3・4のとおりである。

縄文時代早期 この時期の遺構は確認されていないが、当該期の土器が4点出土している。すべてA区からの出土である。

縄文時代前期 岐阜市調査においては、遺構・遺物ともにこの時期のものが最も多く確認されており、人々の活動を確認した時期といえる。当該期の遺構はすべてA区での確認で、遺跡の南寄りに位置するB区では確認されていない。確認された後葉～末葉の竪穴建物8軒は、平面が円形あるいは不整形で径が2.4m～6.5mである。このうち2軒では地床炉が確認された。共通する特徴として、①壁面が緩やかな傾斜をなして床面に至り、床と壁の境界が不明瞭な場合もあること、②柱穴は、明確な規則性がないものの、壁に沿って多くみられること、③貼床は認められないこと等が指摘されている。居住域には、集石遺構18基と土坑24基が分布する。土坑24基のうち、11基は土器や石皿、多量の被熱礫等が意図的に埋められており、うち2基からは骨片が出土していることから墓坑と考えられている。竪穴建物と土坑・集石遺構群との分布から、居住域が土坑・集石遺構を取り囲む環状集落である可能性が指摘されている。出土した土器については、北白川下層Ⅱc式・諸磯式や北白川下層Ⅲ式～大蔵山式、十三菩提式・晴ヶ峰式などに近似する土器型式の存在が指摘されている。また、漆塗土器や複数のベンガラ赤彩土器も出土している。岐阜市調査では、当該期から縄文時代中期後葉にいた



図6 岐阜市調査及びセンター調査の発掘区（国土地理院発行1:25,000地形図「北方」を利用し作成）

るまで人々の生活の痕跡は確認されていない。

縄文時代中期 後葉の堅穴建物2軒（A・C区でそれぞれ1軒）と土坑3基が確認されている。この時期の遺構もB区では確認されていない。A区で確認された堅穴建物は、規模は東西6.2m×南北6.3mで、壁は垂直で幅20cm～30cm、深さ5cm～15cmの壁際溝がめぐる。床面は非常に硬くしるが、貼床は確認されていない。主柱穴は3基確認され、発掘区外の1基を加えて4基の主柱穴があったと推定されている。炉は床面中央やや北よりで大小2ヶ所の穴として見つかり、被熱面や焼土粒を含む埋土も確認されている。また、炉石の抜き取り痕と考えられるものも確認されている。C区で確認した堅穴建物は、一部のみの検出で全体の形状は不明であるが、ともに平面が隅丸方形であることが想定されている。出土遺物でみると、縄文時代前期に続いて当該期のものが多い。

弥生時代 堅穴建物1軒と土坑3基が確認されている。C区で確認された弥生時代の堅穴建物1軒は、平面が隅丸方形で規模は東西6m以上である。堅穴建物の埋土から弥生時代後期山中式頃に比定される土器片が出土している。

飛鳥・奈良時代 この時期になると人々の生活の中心は遺跡南部のB区に移るようである。堅穴建物23軒と土坑2基が確認されているが、B区の遺構が大部分を占める。A区で確認された堅穴建物2軒は、全体の形状は不明であるが、ともに貼床が確認されている。B地点で確認された堅穴建物は、平面は方形で建物の向きは南北方向、壁は垂直、貼床を施す等の共通点が見られる。カマドは一辺のほぼ中央に設けられており、北向きと東向きに限られる。壁際溝は4軒で認められた。B地区では当該期の須恵器や土師器が堅穴建物の埋土から多く出土している。また、堅壺製作用土器が複数の堅穴建物から出土している。

平安時代以降 平安時代以降の遺構はB区で確認された戦国時代の溝3条と掘立柱建物1棟、方形堅穴状遺構1基の他、江戸時代の溝3条がある。A・C区では遺物の出土はあるものの、当該期以降の遺構は確認されていない。

表3 岐阜市調査の主な検出遺構

時代	A区			B区				C区	合計
	堅穴建物	集石遺構	土坑	堅穴建物	掘立柱建物	溝	土坑	堅穴建物	
縄文時代前期	8	18	24						50
縄文時代中期	1		3					1	5
弥生時代			3					1	4
飛鳥・奈良時代	2			21				2	25
戦国時代				1	1	3			5
江戸時代						3			3
合計	11	18	30	22	1	6	2	2	92

※B区で確認した戦国時代の堅穴建物は堅穴状遺構として検出したもの。

表4 岐阜市調査における出土土器・陶磁器(接合前破片数)

地区	縄文土器			弥生土器 土師器	土師器皿	堅壺製作用土器	須恵器	灰輪 陶器	山茶碗	中近世 陶磁器	合計
	早期	前期	中期								
A区	4	22,157	4,555	243	3	0	89	8	52	41	27,152
B区	0	0	0	497	472	55	421	11	18	115	1,589
C区	0	18	20	304	0	0	10	1	13	0	366
A・C間	0	77	22	12	0	0	3	2	4	3	123
合計	4	22,252	4,597	1,056	475	55	523	22	87	159	29,230

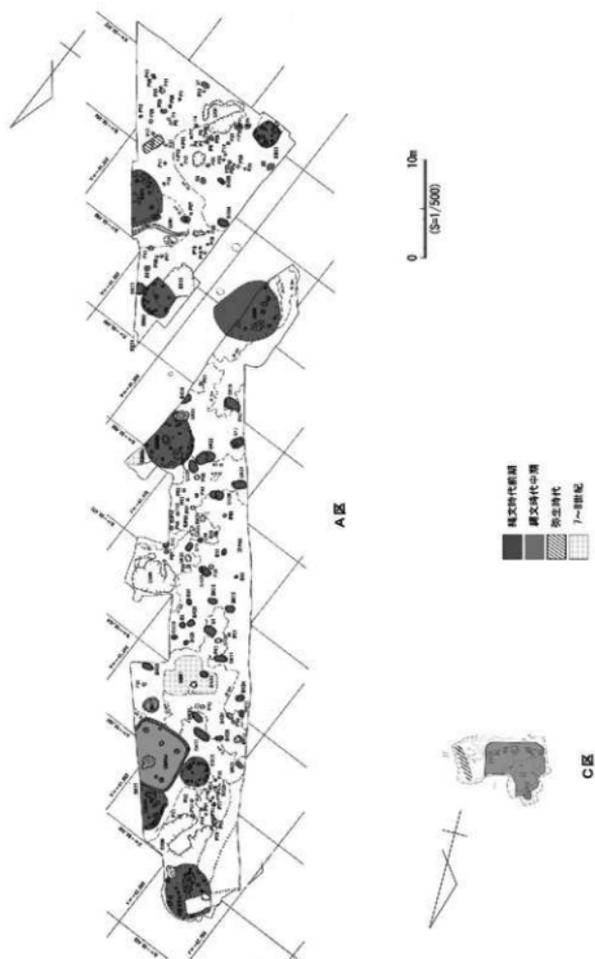


図7 岐阜市調査A・C区遺構分布図（岐阜市教育委員会1995『御望遺跡』）

第3章 調査の成果

第1節 基本層序

平成 26・27 年度に、岐阜県教育委員会が実施した試掘・確認調査で確認された層序、各土層から出土した遺物、遺構の時期を検討し、今回の調査における発掘区土層を基準に基本層序を以下のように設定した(図8)。調査地点によっては、Ⅱ層の堆積が確認されなかった範囲が存在する。以下、基本層序のⅠ層からⅢ層までの詳細及び遺構検出面について記載する。

- Ⅰ a 層 黒褐色若しくは黄灰色の現代の水田耕作土で、発掘区全面で確認した。
- Ⅰ b 層 鉄分沈着が見られるオリーブ褐色若しくは黄褐色の土層である。耕地整理時の整地土及び水田の床土で、発掘区全域で確認した。A地点の西部では、近代の旧河川によって土地が低くなった場所に盛土して整地した範囲を確認した。
- Ⅱ a 層 黒褐色若しくは黒色の土層で、縄文時代前期から古代の遺物を包含する。黒野台地を覆う「クロボク」と呼ばれる黒色腐植土層である。本来の遺構面はⅡ a 層中に存在すると考えられるが、Ⅲ層まで掘り下げないと遺構の検出は困難であった。A地点では部分的に残存し、B・C地点ではほぼ全域で確認した。
- Ⅱ b 層 黒褐色若しくは黒色の土層で、主に縄文時代前期の遺物を包含する。C地点のBD2グリッドからBK7グリッドにかけて確認した(斜線で示した範囲)。ここは縄文時代前期には窪地になっていたと考えられ、その窪んだ部分に堆積した土層である。最も深い地点の層厚は約0.45mである。縄文時代前期後葉から末葉の遺物が包含されることから、この窪地の西寄り底面で検出した縄文時代前期後葉の竪穴建物(SI9)の廃絶後に堆積が始まり、前期の末ごろまでにはほぼ埋まっていたと考えられる。
- Ⅲ層 にくい黄褐色の土層である。この土層の上面を遺構検出面とした。なお、B地点のAG14グリッドからAM18グリッドにかけては層内に径10cm以下の円礫を多く含む範囲(河川堆積層)を確認した。

調査前の平均標高はA地点が23.35m、B地点が23.43m、C地点が23.42mであり、B・C地点に対してA地点がやや低い。A地点はⅡ層を部分的に確認し、Ⅰ b 層直下でⅢ層を確認した範囲が存在する。B地点及びC地点ではほぼ全域でⅡ層を確認することができた。そのため、遺構検出面はA地点ではⅠ b 層基底面若しくはⅢ層上面、B・C地点ではⅢ層上面となる。遺構検出面の平均標高はA地点が22.67m、B地点が22.88m、C地点が22.96mである。遺構検出面は後世に上部が削平されている可能性があるものの、およそ発掘区の北東から南西に向かってゆるやかに下降する状況が確認できた。また、発掘区の北東側では試掘・確認調査で河川堆積層が確認されていることから、御望A遺跡は旧河川に挟まれる紡錘形の微高地上に立地していると考えられる。

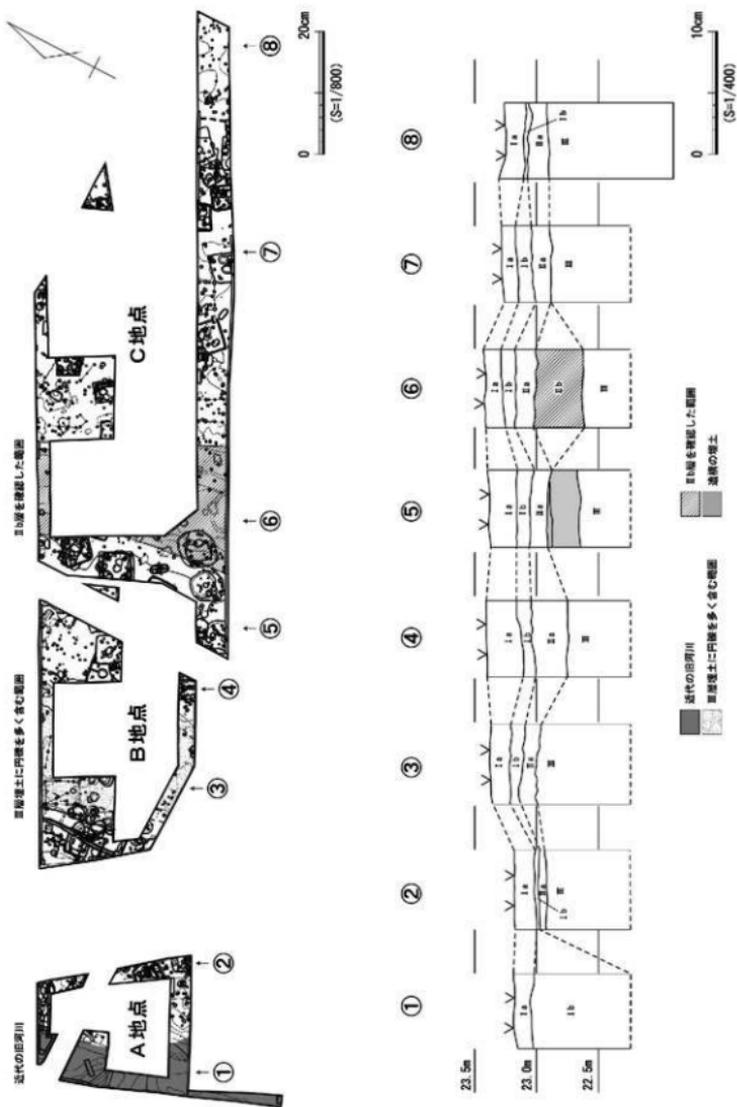


图 8 基本層序模式图

第2節 遺構・遺物の概要

1 遺構概要

(1) 概要

今回の調査で検出した遺構数は表5のとおりである。縄文時代前期、縄文時代中期、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、古代の5時期の竪穴建物と古墳時代後期の掘立柱建物など、縄文時代前期から古代にかけての遺構を確認した。全体では縄文時代前期と古墳時代後期の遺構の割合が高い傾向がみられた。遺構の時期決定は、出土遺物や遺構の重複関係、埋土などから判断したものの、時期不明とした遺構も多い。

本報告書では、竪穴建物及び掘立柱建物についてはすべての遺構について報告した。その他の遺構については、遺跡の性格を検討する上で重要と考えられるものや一括性の高い遺物が出土したものなど、特徴的なものについて報告し、それら以外の遺構は一覧表に代えた。

表5 検出遺構一覧表

時代	SA	SB	SD	SI	SK	SP	合計		
縄文時代前期				3	28	48	9	40	57
縄文時代中期				1	4		1	6	
弥生時代後期～ 古墳時代前期	2		1	6	7		1	17	1
古墳時代後期	4	3		14	13			34	
古代			1	4	2	19	1	7	23
中世以降			1		3		1	5	
不明			2		411		142	555	
合計	6	3	5	28		536	167		745

(2) 遺構の分類

今回検出した遺構は形状と規模、構造から以下の要件に基づき分類し、原則としてA、B、C地点の順で西側から略号と共に番号を付した。

柵 (SA) 建物を構成せず、規則的に並んだ複数の柱穴によって構成されたものを本類とした。また、柵を構成する柱穴を「(付属するSAの番号)-P●」とした。

掘立柱建物 (SB) 向かい合う2辺以上が確認できるように、規則的に並んだ複数の柱穴によって構成され、上屋構造を有すると推定できるものを本類とした。また、掘立柱建物を構成する柱穴を「(付属するSBの番号)-P●」とした。

溝状遺構 (SD) 地面を掘りくぼめた遺構の内、上端の短軸に対して長軸が5倍以上あるものを本類とした。

竪穴建物 (SI) 地表を掘り下げて床面をつくった建物。柱穴、炉、カマド、壁際溝、貯蔵穴など建物を構成する要素のうち、一部又はすべて確認でき、建物の可能性が考えられるものを本類とした。竪穴内で検出した壁際溝は「壁際溝」、カマドは「カマド」、炉は「炉」、貯蔵穴は「貯蔵穴」とし、複数存在する場合は番号を付した。貯蔵穴を囲む周堤状の高まりは貯蔵穴の一部とした。また、主柱穴や土坑は、「(付属するSIの番号)-P●」と表記した。

土坑 (SK) 掘り込みが確認でき、明確に性格づけができないものを本類とした。

単独柱穴 (SP) 土層断面で柱痕跡が確認できる遺構や柱根、礎板、礎盤石、柱あたりがあるもの、建物に伴う柱穴と同様の形状のもので、規則的な配列が確認できず、柱穴列や建物として認定できなかったものを本類とした。

倒木痕 (NW) 下層の土が上層に持ち上げられていることが確認できるものを本類とした。

自然流路 (NR) 幅が広く、自然の水流により形成されたとと思われるものを本類とした。

(3) 遺構一覧表

各遺構の位置や規模などの基礎的情報は、それぞれ種別ごとに作成した遺構一覧表に示した。種別毎で一覧表の項目はやや異なるが、共通する基本項目は次のとおりである。

検出面 基本層序の層位名を使用し、遺構を検出した面について略号で示した。Ⅲ層上面で検出した場合「Ⅲ上」、Ⅰb層基底面で検出した場合「Ⅰb基」と表記した。

平面形・底面形 以下のとおり、形状(a~d)と長軸長と短軸長の比(1~5)で示した。

a-円形 b-方形 c-不定形 d-不明

1-1.2未満 2-1.5未満 3-2.0未満 4-2.0以上 5-不明

埋土・断面形 図9の分類に基づき記載した。

規模 単位はmであるが、()は残存長を示す。

重複関係 「新>旧」の関係を示す。

出土遺物 出土遺物の種別を、下記略号で示した。また、略号の後ろに破片数を併せて記載した。

J-縄文土器、H-弥生土器・土師器、P-須恵器、K-灰釉陶器、Y-山茶碗

T-山茶碗以外の中近世陶磁器、S-石器類、I-金属製品

埋土 (SD・SP・SK)



断面形状 (SD・SP・SK)

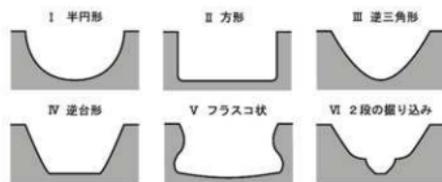


図9 埋土・断面形状模式図

2 遺物概要

(1) 概要

今回の調査では、縄文土器、弥生土器・土師器、須恵器、灰軸陶器、山茶碗、中近世陶磁器などの土器類と、石器類、金属製品が出土した。その出土数は表6のとおりである¹⁾。本報告書では、これらの遺物のうち、遺構の性格や時期を検討する上で必要なものや、分類別の代表的なものを抽出して報告した。

表6 出土遺物一覧表

大別	種別	時期	接合前 破片数 (点)	接合後 破片数 (点)	接合後 破片数 割合	重量 (g)	重量 割合	口縁部 残存率 (x/12)	口縁部 残存率 割合
土器類	縄文土器	早期	1	1	0.01%	9	0.01%	1	0.14%
		前期	7164	6784	47.23%	61471	44.39%	303	41.22%
		中期	246	185	1.29%	1702	1.23%	3	0.41%
		後期	2	2	0.01%	19	0.01%	0	0.00%
		不明	1335	1302	9.06%	7478	5.40%	33	4.49%
	縄文土器小計		8748	8274	57.60%	70679	51.03%	340	46.26%
	弥生土器・土師器		5961	5332	37.12%	50798	36.68%	238	32.38%
	須恵器		707	608	4.23%	14774	10.67%	124	16.87%
	灰軸陶器		54	27	0.19%	706	0.51%	13	1.77%
	山茶碗		52	50	0.35%	382	0.28%	17	2.31%
	中近世陶磁器		82	74	0.52%	1155	0.83%	3	0.41%
小計		15604	14365	100.00%	138494	100.00%	735	100.00%	
石器類		1115	1115	—	—	—	—	—	
金属製品		6	5	—	456	—	—	—	
合計		16725	15485	—	—	—	—	—	

① 土器類

出土した土器の種別ごとの点数は表6のとおりである。土器の年代観や器種分類は既存の編年に従った²⁾。

縄文土器

8,738点出土し、出土した土器の57.60%を占める。早期から後期のものがあり、前期と中期が大部分を占める。早期のものは1点、後期のものは2点出土した。出土量が多い前期後葉の土器は、尾元遺跡で設定された前期後葉土器の器種分類³⁾を参考に次のように設定したが、器形が判明する土器は少ないため、細分類まで行うことができたものは少ない。また、文様についても文様a種から文様c種の分類⁴⁾を参考に、前期後葉の細別時期の検討を器種分類と合わせて行った。

深鉢A類 底部から口縁部にかけて緩やかに開く器形で、頸部の括れや胴部の膨らみが小さく、突帯による文様を口縁部に施す。口縁部がやや内彎するか直線的で、胴部の下位でやや膨らみを持つものをA1類、口縁部が直線的で胴部の上位から中位で膨らみを持つものをA2類、底部から口縁部にかけて直線的に開くものをA3類、器形はA2類やA3類と同様であるが口縁部内面を肥厚させるものをA4類とした。ただし、A4類は今回の調査では確認できなかった。

深鉢B類 A類と比較して頸部の括れが強い器形で、口縁部は内彎若しくは屈曲し、突帯による文様を口縁部に施す。口縁部が内彎して頸部の括れがやや強く、胴部の下位で膨らみを持つものをB1類、口縁部が強く内彎するか屈曲するものをB2類、口縁部が内彎するか屈曲し胴部の膨らみが上位から中

位にあるものをB3類とした。ただし、今回の調査ではB3類は確認できなかった。

深鉢C類 口縁部が内彎若しくは直線的で、頸部が括れる器形で、突帯による文様がほぼ口縁部の幅に対応して施される。口縁部が内彎若しくは直線的に立ち上がるものをC1類とした。C2類は、口縁部が直線的で頸部が強く括れ、胴部がやや強く張るものである。器形はC2類に類似するが、口縁部がやや長くなり、口縁部内面を肥厚させるものをC3類とした。ただし、今回の調査ではC3類は確認できなかった。

深鉢D類 口縁部が短く頸部は強く括れるか屈曲し、胴部が強く張り、突帯による文様が口縁から胴部に施す。口縁部が直線的なものや屈曲するものをD1類、口縁部が強く内彎するものをD1類、口縁部内面を肥厚させるものをD3類とした。胴部に文様を施すことが、A類からC類との大きな違いである。

深鉢E類 頸部が屈曲して口縁部が内彎し、底部から上方に立ち上がって胴部で外方に強く張り出す器形で、突帯による文様を施す。口縁部内面が肥厚し縄文帯となるのが一般的である。胴部には縄文を地文として施すだけのものをE1類、胴部にも文様を施すものをE2類とした。

深鉢F類 沈線や押し沈線、連続刺突により文様を施すもので、平行線や曲線、斜行線により幾何学的な文様を施すものや雑な縦位沈線や斜行沈線などがある。また、口縁端部に刻みを施すものや部分的に突帯を施すものもある。

深鉢G類 無文の土器である。地文に縄文を施すものが多く、口縁端部に刻みを施すものがある。

鉢 口縁部が直線的に開く器形が多いが、口縁部が強く内湾するものが少量ある。文様は半載竹管によるものが多く、赤彩を施すものがある。

浅鉢 諸磯B式系の列孔浅鉢が出土した。無文のままのものや、沈線や刻み、刺突により幾何学的な文様を施すものがある。

その他 器種不明の土器やミニチュア土器が少量出土した。

② 石器類

器種毎の出土点数と割合を表7に、器種別石材を表8に示す。図示した遺物は、遺構出土のものを中心に抽出した。また、剥片類は割合から除外している。

打製石鏃

鋭利な先端部と柄に装着するための基部を打ち欠きによって作出した小型の石器。

基部の形態によって4分類し、さらに数の多い1類を基部の挟りの形態からa～eに細分した(図10)。なお、石鏃一覧表(表59)には側縁部や脚部の形状、欠損部位についても、図11・12に基づいて一覧表に記載した。また、素材となった剥片の剥離面の残存状況を、片面に残る-1、両面に残る-2、なし-3、小さく残る-a、大きく残る-bと記載した。

表7 石器類器種別数量

器種	石鏃	尖頭鏃	石鏃	石匙	***	楔形石鏃	打製石鏃	打製石鏃	石核	RF	MF	打製石鏃	打製石鏃	***	石量	石製品	砥石	剥片類	合計
出土点数(点)	61	1	15	15	30	1	7	9	6	71	157	28	16	44	8	1	12	633	1115
割合(%)	12.7	0.2	3.1	3.1	6.2	0.2	1.5	1.9	1.2	14.7	32.6	5.8	3.3	9.1	1.7	0.2	2.5	-	100

- 1 a類 基部の抉りが丸く浅い (0.3cm未満) もの。
 1 b類 基部の抉りが丸くやや深い (0.3cm以上) もの。
 1 c類 基部の抉りが「く」字状の浅い (0.3cm未満) もの。
 1 d類 基部の抉りが「く」字状の深い (0.3cm以上) もの。
 1 e類 基部の抉りが「U」字状のもの。
 2類 基部に抉りがなく、直線のかやや外湾するもの。

表8 器種別石材一覧表

出土点数 器種内石材比率%	石鏝	尖頭器	石錘	石匙	スレイパー	楔形石器	打製石斧	磨製石斧	石槌	RF	MF	打欠石鏝	切目石鏝	***	石皿	石製品	砥石	剥片類	合計 点数 石材 比率
黒曜石	2								1	1	2							28	34
	3.3								16.7	1.4	1.3							4.4	3.0
チャート	51	1	15	15	30	1	1		4	65	153							537	873
	83.6	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	14.3		66.6	91.6	97.4							84.8	78.3
下呂石	3								1	1								9	14
	4.9								16.7	1.4								1.4	1.3
サヌカイト	4									3	2							55	64
	6.6								4.2	1.3								8.7	5.7
凝灰岩							1	8						1					10
							14.3	88.9						2.3					0.9
流紋岩														8	1		1		10
														18.2	12.5		8.3		0.9
安山岩								1						13	1				15
								11.1						29.5	12.5				1.3
泥岩												10	7						17
												35.7	43.8						1.5
砂岩												8	2	17	4		10	1	42
												28.6	12.4	38.6	50.0		83.4	0.2	3.8
花崗岩														4	1				5
														9.1	12.5				0.4
花崗閃緑岩														1	1				2
														2.3	12.5				0.2
ホルンフェルス																		2	2
																		0.3	0.2
粘板岩	1						4			1		9	7				1	1	24
	1.6						57.1			1.4		32.1	43.8				8.3	0.2	2.2
片麻岩												1							1
												3.6							0.1
緑色片岩								1											1
								14.3											0.1
滑石																1			1
															100.0				0.1
点数合計	61	1	15	15	30	1	7	9	6	71	157	28	16	44	8	1	12	633	1115

3類 剥離が粗いことから、石鏃未成品と思われるもの。

4類 基部を欠損しており分類できないもの。

磨製石鏃

鋭利な先端部と柄に装着するための基部を研磨によって作出した小型の石器。なお、石鏃一覧（表59）には側縁部や脚部の形状、欠損部位についても、図10～12に基づいて一覧表に記載した。

尖頭器

先端と側縁部を槍先形に加工した石器。

石錐

鋭利で細い先端部を作り出した石器。錐部と基部の形状により以下のように分類した。

1類 不定型な剥離を素材とし、その一端に簡単な調整を加えて、短い錐部を作り出したもの。この中には、調整剥離というよりも微細な剥離痕というべきものも含まれている。



図10 打製・磨製石鏃の基部による分類模式図



図11 打製・磨製石鏃の側縁及び脚部形態分類模式図

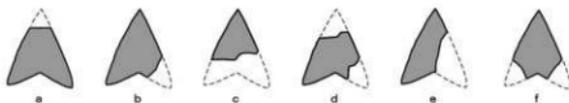


図12 打製・磨製石鏃欠損部位分類模式図

- 2類 素材となる剥片の側辺に調整を加えて鈍部を作り出すことにより、平面形が概ね三角形若しくは菱形となり、鈍部と基部との境が不明瞭なもの。
- 3類 素材となる剥片のほぼ全周に調整を加えて、細身の棒状になるもの。
- 4類 素材となる剥片の側辺に調整を加えて鈍部を作り出し、基部との境が明瞭なもの。

石匙

素材剥片の一部に、2ヶ所から抉り状の剥離を施すことにより、つまみ状の小突起を形成し、縁辺部に連続した剥離を施して、刃部を作り出した石器。

スクレイパー

素材剥片の縁辺部に連続した剥離を施して、刃部を作り出した石器や、抉り状の刃部を持つもの。ただし、連続した剥離が認められても1/2以上の欠損があると想定されたものは、便宜的に調整剥離を施す剥片（RF）に含めた。刃部の位置や形状により以下のように分類した。

- 1類 素材剥片の側辺に刃部を1つ作り出すもので、刃部の形状によりa～bに細分した。
 - 1 a類 刃部が直線的なもの（直刃）。
 - 1 b類 刃部が外彎するもの（円刃）。
- 2類 素材剥片の末端辺若しくは基辺に刃部を作り出すもので、素材剥片や刃部の形状によりaとbに細分した。
 - 2 a類 縦長剥片を用い、側辺にも刃部を作り出すもの。
 - 2 b類 縦長剥片を用いたもの。
- 3類 素材剥片の両側辺、又は末端辺と基部に刃部を作り出すもので、両側辺の位置関係によりaとbに細分した。
 - 3 a類 刃部が個々に分離したもの。
 - 3 b類 両側辺が末端で先端を形成するもの。
- 4類 素材剥片の側辺に、抉り状の刃部を作り出すもので、他の刃部を併せ持つか否かでaとbに細分した。
 - 4 a類 抉り状の刃部のみをもつもの。
 - 4 b類 抉り状の刃部と1類に該当する刃部を併せ持つもの。

楔形石器

剥片の相対する二縁辺に、潰れ状あるいは階段状の剥離痕が発達する石器。

打製石斧

略長方形の形態で、ほぼ全周を二次加工し、長軸の一端に刃部を持つ石器。刃部は長軸の両端にある場合もある。この中には、打製石斧片と思われる小片についても点数に加えている。平面形態から以下のように分類した。

- 1類 両側縁がほぼ平行するもので、いわゆる短冊形。
- 2類 両側縁が基部に向かって収束するもので、いわゆる楔形。刃部が最大幅となる。
- 3類 破損のため平面形態が不明なものや打製石斧の破片と判断したもの。

なお、欠損部位については図13に基づいて、刃部形態・刃部使用痕については以下のように記号化し、基部装着痕・自然面についてはその有無を一覧表（表66）に記載した。

刃部形態

- 1 平らなもの（直刃）
- 2 外彎するもの（円刃）
- 3 中心軸に対して傾くもの（偏刃）

刃部使用痕

磨耗

- 1 磨耗が確認できるもので、磨耗の程度や範囲によって次のように細分した。
 - 1 a 表裏面や両側面に程度や範囲の差がないもの。
 - 1 b 表裏面に程度や範囲に差があるもの。
- 2 磨耗を確認できないもの。

刃こぼれ状の剥離

- 1 刃部の調整剥離とは異なり、刃こぼれと判断したもので、その位置により次のように細分した。
 - 1 a 刃部中央や全体的に認められるもの
 - 1 b 側面寄りに位置するもの
- 2 刃こぼれ状の剥離を確認できないもの

線状痕

- 1 線状痕が確認できるもので、刃部に対する方向で次のように細分した。
 - 1 a 刃部と直行する方向（長軸に平行）に確認できるもの。
 - 1 b 刃部に斜行する方向に確認できるもの

磨裂石斧

略長方形の形態で、刃部を研磨により作り出した石器。刃部形態、欠損部位、刃部の刃こぼれ状の剥離は打裂石斧の刃部形態・欠損部位・刃部使用痕にしたがって、一覧表（表 67）に記載した。

石核

素材剥片を剥離した残核を総称して石核とした。この中には、残核をスクレイパーなどに転用したものは含めていない。

調整剥離を施す剥片（RF）

素材剥片の縁辺部に二次加工を施すものうち、スクレイパーには含めなかったものである。



図13 打裂石斧欠損部位模式図

微細な剥離痕を有する剥片 (MF)

剥片の縁辺に微細な剥離痕が確認できる剥片である。鋭い縁辺を刃部として使用した結果、刃こぼれ状の微細な剥離痕が生じたものと、偶発的に生じたものがあり、これらを明確に区別することはできなかったため、両者を合わせて微細な剥離痕を有する剥片 (MF) とした。微細な剥離痕は、スクレイパーの刃部で視察できる連続した剥離が2mm前後の長さを持つため、便宜的に長さ2mm未満の長さのものとした。

打欠石錘

楕円形や細長い小型の自然礫の両端を打ち欠いて、紐状のものを掛けるための袂りを作り出した石器。一覧表に記載した計測部位は、渡辺誠氏の提唱 (渡辺ほか1985) を参考とし、図14の位置で計測した。なお、切目石錘についても同様に計測した。

切目石錘

打欠石錘と同様の素材を用い、両端を擦って紐状のものを掛けるための袂りを作り出した石器。

磨石・敲石類

握り拳大から手の平大の大きさで、楕円形の川原石 (円礫) を用い、表面に磨痕や敲打痕などが観察できる石器。磨痕と敲打痕が混在する石器が多いことから、両者を含めて磨石・敲石類とした。平坦な面と側面に使用による磨痕や敲き痕、凹みがあり、これらの使用痕の組み合わせと位置によって、以下のように分類した。なお、4類としたものは、敲石として一器種を設定すべきであったが、便宜上ここに含めた。

- 1類 平坦面や側面に磨痕があるもので、使用痕の組み合わせにより a～c に細分した。
 - 1 a類 磨痕だけが確認できるもの。
 - 1 b類 平坦面は磨痕だけ、側面は磨痕と他の使用痕が確認できるもの。
 - 1 c類 平坦面は磨痕だけ、側面は磨痕以外の使用痕が確認できるもの。
- 2類 平坦面に磨痕と凹みがあるもので、側面での使用痕の組み合わせにより a・b に細分した。
 - 2 a類 側面に磨痕と他の使用痕が確認できるもの。
 - 2 b類 側面に磨痕が確認できないもの。
- 3類 平坦面と側面に磨痕が確認できないもの。
- 4類 細長い棒状の自然礫を用いたもので、線状の敲打痕が確認できるもの。

なお、平坦面と側面の使用痕については、以下のように記号化して一覧表 (表78・79) に記載した。

- a 磨痕一明瞭な痕跡や、平滑な面、あるいは平坦な面を形成している範囲。
- b 1 粗い敲打の集中による凹みが、中央部分に1ヶ所のもの。
- b 2 粗い敲打の集中による凹みが、片寄った位置にあるもの。
- b 3 粗い敲打の集中による凹みが、中央部分で2つ以上

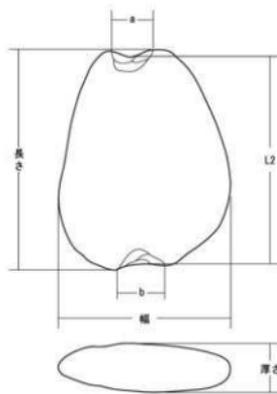


図14 石錘計測部位

重なるもの。

- b 4 粗い敲打の集中による凹みが、2つ以上離れてあるもの。
- b 5 粗い敲打痕が散在するもの。
- b 6 粗い敲打痕が集中して面を形成するもの。

石皿・台石

手の平大よりも大きく扁平な川原石の平坦面に、磨痕や敲打痕が認められる石器。平坦面と側面を確認できた使用痕は、磨石・敲石類の使用痕と同じ記号を一覧表(表80)に記載した。

砥石

表面に磨痕や擦痕が明瞭に残る石器。この中には元々石皿として機能していた可能性があるものもある。また、砥面に敲打痕が確認できるものもあるが、砥面をもつものはすべて砥石とした。

石製品

蛸石製の球状耳飾1点が出土した。遺物包含層からの出土である。

剥片類

剥離作業によって生じた剥片や碎片などをまとめて剥片類とした。二次加工や微細な剥離痕が確認できなかったものである。

③ 金属製品

鉄製品が4点出土した。内訳は刀子1点、釘3点である。

(2) 遺物一覧表・遺物実測図

① 土器観察表

- ・縄文土器は「縄文土器観察表」に、弥生土器・土師器は「弥生土器・土師器観察表」に、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、山茶碗、中近世陶磁器は「須恵器・陶磁器類観察表」に一覧にして示した。
- ・「遺構名・グリッド」は、遺物が出土した遺構若しくは調査区画(グリッド)で、複数の遺構や調査区画から出土した遺物が接合した場合には、遺構名や調査区画を記入している。
- ・「層位」は、表土層・遺物包含層出土の場合は基本層序番号(I a・I b・II a・II b)を、遺構出土の場合は土層分層前は埋土を深さ約5cmごとに区切り、上層から順に「a・b・cなど」の順に付与した。分層後はその土層番号(1・2・3など)を記入した。複数の層位から出土した遺物が接合した場合は、すべての層位を記入した。
- ・土器の観察表にある、「口径」・「器高」・「底径」の単位はcmである。欠損している場合は、残存長を()内に記入した。
- ・「残存率」の口縁部残存率は、 $(X/12)$ を計測(宇野 1992)し、12分の1以下については、1/12に切り上げた。不明のものは「-」を記入した。
- ・「胎土」に記載した含有物は、肉眼で識別したものである。
- ・縄文土器観察表の「文様」は、沈線・刺突・隆帯などと記載し、その幅や径を()内に記入した。単位はcmである。

② 石器一覧表・金属製品一覧表

- ・「掲載番号」「取上番号」「遺構名・グリッド」「層位」は、土器観察表と同じである。
- ・「石材」の鑑定は、肉眼観察で行った。

- ・「長さ」・「幅」・「厚さ」の単位はcmである。また、「質量」の単位はgである。「刃角」の単位は度であるが、小数点第1位以下は切り上げた。なお、欠損している場合は、()内に残存値を記入した。
- ・摩耗痕や線状痕の有無は、ルーペ(×10)で行った。

③ 遺物実測図

- ・土器の調整が重なる部分は、原則として最も新しい調整を図化した。
- ・土器片や土偶片のうち割れ面を明確にした方がよい場合は、網掛けをした。
- ・石器実測図中の網掛けは摩耗の範囲を、実線は線状痕の方向を表した。
- ・石器の自然面はドット、節理面は一点鎖線で表した。

注

- 1) 口縁部残存率の計測については以下の文献を参考とし、12分の1未満の破片は12分の1に切り上げ、12分の1以上の破片は小数点以下第1位まで計測した。
宇野隆夫 1992「食器計量の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第40集、国立歴史民俗博物館
- 2) 出土遺物の年代観や器種分類は、以下の文献を参考とした。
財団法人岐阜県教育文化財団文化財保護センター2003『尾元遺跡』
赤塚次郎 2002「総説 土器様式の偏差と古墳文化」『考古資料大観 第2巻 弥生古墳時代 土器Ⅱ』、小学館
早野浩二 2003「東海・中部地方の土器」『考古資料大観 第3巻 弥生古墳時代 土器Ⅲ』、小学館
各務原市教育委員会 1984『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』
渡邊博人 2008「美濃須衛強について」『日本考古学協会 2008 愛知県大会研究発表資料』、考古学協会 2008 愛知大会実行委員会
愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史 別冊 古代 猿投系』
- 3) 財団法人岐阜県文化財保護センター『尾元遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第82集の「第5章 まとめ 2 縄文時代前期後葉の土器」において検討されたもの。
- 4) 3)の文献において、深鉢A類から深鉢E類に施される文様を3種類に大きく分類している。文様a種は口縁部に平行する直線的な文様を基本とし、文様b種は横位の文様で区画された間に直線や弧状線、斜行線などを横位に展開する文様で、文様c種は文様b種に単位文様となる円形、半円形、紡錘形、縦位線などを要所に配置したものである。それぞれの文様は、施される器種が偏る傾向が認められている。